

◆第19集◆ '97平和学習資料

# 私の戦争体験

子供たちの明るい未来のために語り継ぎます

いずみ

1997年6月



## 18歳で爆死した兄がくれた砂糖

岬町 井口 絹子

昭和二十年二月頃から大阪には空襲が何度もあり、もう勉強も出来ない状態になっていました。このため、田舎のある人は田舎へ縁故疎開、田舎のない人は集団疎開をする事になりました。五月の初め、大阪市北中道国民学校の二年生、三年生の一行は先生の引率のもと、奈良県五所町の円照寺へ、まるで遠足にでも行く様な明るい笑顔で出発しました。辛い生活が待っている事も知らないで。

入学したばかりの一年生も到着してお寺での生活が始まりました。

空襲は無いものの、親が恋しく、心の中は涙でいっぱい、そして食事の量は大変少なくていつも空腹、顔が小さくなって元気がなくなってきました。家が恋しくてお寺を脱走した子もいました。

ある時、近くの学校へ身体測定に行きました。その小学生に、「やあい、疎開の子や」とか言って石を投げつけられました。でも元気の無い私達は、黙っているだけでした。四年生以上の児童は別

の寺に疎開していましたが、その地域の人達は親切だったそうです。月に一度の保護者との面会日は、嬉しくて、いっぱい食べて楽しい一日を過ごしました。けれども満腹になった後で苦しくなって吐いてしまう始末でした。別れの時がくると、泣き叫んで親を追う子供達で大変な騒ぎになるのです。

ある日、兄が寺に面会に来て、紙に包んだ砂糖をくれました。他の人に隠れて砂糖をなめました。兄に会ったのは、この時が最後でした。七月二十四日の空襲で十八歳の兄は爆死したのです。この為、母が迎えに来て、家に戻りました。翌日、両親と隣家のOさんの四人で大阪桜島の住友金属の現場に行きました。兄の死んだ防空壕では作業員が腰あたりまで水につかって、遺体の搜索をしていました。壕の横に青い頭部が一つ置いてあり、水中からは手が浮いていました。

母は毎日位牌の前で泣き暮らしました。そのまま、自宅にとどまっていたので、

八月十五日は大阪で終戦を迎えました。その日の午前中に空襲警報がなり、防空壕に母と近所の人十人程で避難しました。「バナー」という音が響き、地震みたいに大きくゆれて、もう駄目か、もう駄目かと母と手を握りしめてどの位時間がたったかわかりませんが、治まって外に出ました。近くに爆弾は落ちていません

でしたが、家の中の棚の物は全部落ちていて砂だらけでした。まもなく天皇の玉音が放送され、戦争が終わった事を知りました。奈良の疎開先へ一旦戻り、彼岸のころ正式に自宅に帰る事が出来ました。十月頃、同級生のN子さん、上級生のMさんが亡くなりました。栄養失調でした。

## その日、まで老け込んでたまるか

大阪市 大谷 進

先頃、テレビで放映された三浦綾子氏の「銃口」が、あの時代をきめ細かく伝えている。

一九四三年、大阪の(旧制)男子中学校の入試には筆記試験がなく、体力試験は砂袋を担いで百メートル疾走や手榴弾の遠投などで、口頭試問では戦争の目的、小国民(子供)の心得などを聞かれた。「天皇陛下のために死ぬことが最大の親孝行」と、教えられた通りすらすらと答えた。小学校と同じように式日には国旗掲揚や「教育勅語」の奉読(校長の朗読を聞く)、宮城遙拝(宮城の方を拝

む)があった。

町道場での剣道も、中学校での柔道部の活動も、二年生の途中から授業がなくなり、工場へ通うようになって中断した。軍人への憧れは、電車の運転手に憧れるのと大差なかったといまは思う。生徒と入れ代わりに学校には戦車隊が入った。米軍の上陸に備えて和歌山へ地下壕を掘りに行った。畑のトマトを食べた生徒が教官に鞘ごと軍刀で殴られた。大阪が空襲されているので家に帰るように言われ、塚で電車を降りて、一緒に作業をした和歌山の女学生のことを考えながら大和川

まで歩いて来ると、広い範囲に黒煙が見えた。悪い想像をしたが、家は焼けていなかった。

ラジオで終戦の玉音(天皇本人の声)放送があったが言葉が難しく、「もっと頑張れ」という話だと思った。「戦争が終わった」と正式に学校から聞いた記憶はない。学校には戦軍隊はおらず、毎日、片付けをした。いつの間にかアメリカ兵がいっぱい来て街の様子がすっかり変わった。アメリカの飛行機が飛ぶと物陰に隠れる習慣はしばらく残った。先生たちは「民主主義こそ大事だ」と言いはじめた。生徒会や新聞部ができ、「長髪を認めよ」の同盟休校が広がった。戦争中の指導者が東京で裁判を受けていた。父は日露戦争でもらった勲章を写真撮影の時もつけなくなり、庭を畑にして家族の食料を確保した。

私は青春を迎えつつあった。平和、主権在民、基本的人権などの理念が分かる

言葉で伝えられ、国じゅうが明るくうねっていた。アメリカが輝いて見えた。だが心の底では大人、教師、新聞などへの不信感が淀み、人間嫌いの方向へ進もうとしていた。焼け跡の闇市やあちこちで険しい顔の大人や子供が毎日争っていた。考えたすえ教師になった。生徒の前で小さな間違いはしても、大きな嘘をつきたくはなかった。組合活動に参加し、勉強もした。この国にも民主主義の歴史が地下に埋もれていたのを知った。挫折しうになりながらも、仕事と生活と勉強を通して、民主主義の中にこそ、人がらしく生きられる未来があると信じられるようになった。近頃、新聞の投書欄に同世代(六十歳代)の発言が目につく。サギ師や泥棒を権力の座から引き下ろすまで老け込んでたまるかという、同じ思いが伝わって来て楽しい。

(一九三〇年生まれ)

## 父の、悲しすぎる青春

堺市 西谷 明

「トロトラスト」という言葉をご存知でしょうか。私の父は、平成六年十二月十四日に亡くなりました。死因はトロトラストによる肝腎症候群による腎不全でした。

大正八年生まれの父は、昭和十四年十二月一日歩兵第三連隊に入営しました。そして中支の各地を転戦していた昭和十六年四月二十日に中国浙江省において右上膊の貫通銃創を受け、野戦病院を転々としながら治療を受けた後、動脈瘤併発のため上海港から同年七月十四日に内地還送となり、東京陸軍軍医学校で同年十一月中旬に動脈瘤摘出手術を受けました。この時に造影剤としてトロトラストを注射されました。手術後に胸膜炎にもなりましたが、経過もよく昭和十七年五月十五日に無事退院しました。再度、召集されましたが、浜松で終戦をむかえました。それから三十有余年の歳月が過ぎた昭和五四年の厚生省の傷痍軍人の一斉検査で、トロトラストが注入されていたことが判明しました。

トロトラストとは昭和四年にドイツで製造された造影剤です。放射性物質トリウムが20ccの容液の中に4グラム入っているそうです。一九三〇年から五〇年ごろにかけて、ヨーロッパや旧陸海軍で使用され、日本全国で約三万人、父の住

んでいた三重県では三百人の人達がトロトラストの注射を受けていたそうです。一度体の中に入ったトロトラストは肝臓や脾臓に蓄積され、決して体外に排出されることはなく、半永久的に消滅することとはなく、トリウムの物理的半減期は百四十億年だそうです。

父は三重大で年二回の検診を受けていました。最後の検診となった平成六年十月に腹水がたまっているから入院するよういわれ、その時に父の余命は長くても二カ月、短かくても一カ月と言われ、お医者さんから父のレントゲン写真をみせてもらいましたが、注射を受けて五十一年以上も経過しているのに、父の肝臓や、脾臓やリンパ腺は、改めて造影剤を使用せずとも夜空の星のように輝いておりました。病院の先生に「父は五十年以上も二十四時間休みなくレントゲン撮影を受けていたようなものですか」とたずねますと、先生は「そんな軽いものではなく、アルファ線体を体の中に持っているような人はいない」と答えられました。

トリウムは、現在、原子力発電等で社会問題となっている放射性元素プルトニウムと同一種類の放射線だそうです。トロトラスト注入後三十年で広島長崎で被爆し即死された方の三倍の被爆量になるそうです。父は亡くなるまでに広島原

爆を五回被爆したようなものです。ガンの発生は普通人の百倍で白血病や血行障害もおきやすく、ほとんどの方が、肝硬変や肝臓ガンで亡くなられるそうです。

父は七十歳ごろに三日間で頭髪がすべて真っ白になりました。それからは一年ごとに三歳ずつ年老いていくような老け方でした。父は三重県でトロトラストの注射を受けた最後の生き残りでした。父はガンにもならず七十五歳まで生き抜きましたが、亡くなる前は九十歳ぐらいに見えました。

昭和五四年に厚生省から、検査の結果トロトラストが注入されています、と事務的な通知が届いた時の父の衝撃は、いかばかりだったろうかと思えます。私は子供の頃、父のことを、なまけ者だと思っておりましたが、父にこんな悲しい青春があったということも、また、長年本人さえも知らない苦しみがあったということ

とも詳しくは知りませんでした。死後に出てきた日記で初めて分かりました。父は最後は母の事だけを気にかけておりましたが、家族に見守られての安らかな最期でした。二度目の戦死をするのだと言って闘病しておりました。私には父は戦後五十年を目前にして戦死したのだと思えませんでした。

戦争は本当にむごいものだと思います。不条理なことが平然と行なわれるのが戦争なんだと思いました。私は平和な時代に生まれ育ちました。次の世代にも、この平和を残していけるよう伝えていくことが、戦争で苦しんだ方々に対しての何よりの鎮魂であり、少しでも行動していくことが私たち世代の使命なんだと思います。つたないペンをとらせていただきました。

## 戦争はいやです

堺市 池田 ますみ

私の父は海が好きで、夏には北陸の荒

海で遠泳をしていたと聞いていました。

海好きが昇じて旧制の高等学校を卒業すると、単身神戸へ出て来て商船会社に入社しました。世界各地を航海した楽しい話は子供の頃によくして呉れました。

私が覚えている、辛い思い出は、南米航路に乗っていた頃のことです。日本からブラジルへ移民していく人達をたくさん乗せて出帆して行く光景です。五色のテープを交換し船が岸壁を離れて行く時に、地上も船上も此の世の別れと泣いていました。その後大東亜戦争がぼっ発しました。移民して行った人達の苦労は戦後たくさん聞きました。

大東亜戦争が激しくなり、商船は国の御用船となり、南方へ兵隊さんをたくさん乗せて五艘も六艘も船団を組んで夜中に出航して行きました。台湾や東支那海の方へ行くと必ず米機の爆撃にあい、船団の船が被害にありました。また、魚雷に当って沈没する船があり、兵隊さんや乗組員が戦死しました。被害にあわなかった父の船は、南方の島へ兵隊さんを降ろして日本へ帰って来ましたが、何時戦死するか分からない航海を続けていました。昭和十九年になると、B29が神戸にも度々飛来するようになり、空襲警報のサイレンが鳴り、電気を消してなりをひそめ、防空頭巾をかぶって飛行機の去って行くのを待ちました。向かいの小学校に

は明朝早く神戸港から出航する船に乗る兵隊さん達がいましたので、学校のまわりの家は立退きのため取り壊されることになり、私達も避難することになりました。急きょ石川県に疎開することになりました。小学生の妹と私は小学校と女学校の転校届を持って行きました。姉は東京海上火災に勤めていましたので、当時は転勤させてくれました。

言葉も分からず、その年は豪雪のため、両側に積み上げられた雪の道を歩いて通学するのです。マントもなく靴も降る雪に濡れますし長靴もなく足は冷たくて死にそうでした。品物が無い時代ですから買うことも出来ませんでした。女学校の三年生になると、学徒動員といって軍需工場へ動員されました。落下傘を作る工場です。絹糸の産地なので落下傘の紐だときかされていました。お寺へ泊り込みで、一般の女工さんと一緒に一生懸命働きました。配給米と言って学生にも特別にお米の配給がありました。「弱音を吐きません勝つまでは」の合言葉に頑張った乙女時代です。

私達の女学校時代は、米英に勝つことだけを目標に、国民全員がまい進していた時代です。結局国民を巻きぞえに悲惨な時代を送らなければならなかった。これは、上部の人に責任があるように思い

ます。娘達に話しても、現実としてわかないようです。しかし今のあり余った、

ぜいたくは誰が矯正すれば良いのか。私達に出来ることがあればと考えます。

## 生後8カ月の弟を背負って

泉南市 富田 章

戦後五十余年が過ぎ去り、もう、小学生だった頃の記憶も定かではありませんが、作文の時間に、何度か、宛名のわからない慰問文を、とまどいを感じながら書いた憶えがあります。また、図書の授業は、女生徒も進んで軍艦や戦闘機の爆撃の絵を描き、お昼の休けい時間には、国民歌謡や軍歌を意味のよくわからないまま、みんなと大声で歌っていました。

昭和十九年の春。いよいよ大阪も何時空襲にみまわれるかわからないと言つので、産まれ育った大阪市内から西宮へ転宅しました。阪急夙川駅に近い静かな住宅街で、遠く海鳴りが聞こえ、夙川の堤は美しい松並木と四季折々の花が咲き乱れ、それはとてもすばらしい環境で、夏は香栢園の浜で思う存分海水浴も楽しみ、小学生だった私たちきょうだいには、まだまだのん気な日々でした。

秋になって、庭に防空壕が掘られ、めずらしい遊び場所ができた幼い弟は喜んでいましたが、ある晩、本当に警報のサイレンが鳴り、産まれたばかりの赤ん坊を抱いた母とこの壕へ逃げ込み、私達こどもは初めて戦争を身近に意識したものです。この後、門外の空地に大きく頑丈な防空壕を造り、近所の人達も一緒に避難する事が度重なり、だんだん戦争が激しくなったことは、小さな弟にもわかるようになりました。警戒警報が発令されれば登校せず、校内に居る時はすぐ下校が頻繁になり、学校でも授業以外の避難訓練や上級生は救護訓練等、児童といえどもみんな真剣にやりました。

翌二十年三月、とうとう大阪の大空襲で、父の実家も焼けてしまい、被災して丸はだかになった伯父一家六人が同居、物資不足の時代で、大家族を迎えて、母

はずい分苦労しました。四月には父にも召集令状がきまして、あわただしく父を見送り、伯父一家も山の手へ引越してゆきました。しばらく大家族で暮らしていましたが、我が家には肺炎を患った病上りの母と赤ん坊と小学生の子供だけが残され、警報が出る度、父のいない淋しさで心細さで、長女の私も一緒に泣きたいと思ったものでした。

それでも春から女学校へ進学し、電車通学となりましたが、登下校の途中で警報が出ますと、どこでも電車から降りて見知らぬ人達と共に、手近な壕へ避難するのが大変でした。

忘れもいたしません。六月五日、早朝から警戒警報のサイレン、そしてすぐ空襲警報となり、家族は朝食の途中で防空壕に避難しました。間もなくB29のゴーゴーという爆音とヒューヒュー、ドドンと焼夷弾の落下する音が聞こえ、防空壕の戸を開けると辺りは夕闇のように煙で薄暗く、あちこちでメラメラと火の手が上っていました。「壕に居ては焼け死にます。早く川へ逃げなさい」警防団員の指令でみんな夙川の堤へ走りました。逃げる途中でも、空から絶え間なく焼夷弾の細かい破片がバラバラに燃えながら落ちてきます。足元にも燃え上っているものがあり、ほんとうに恐ろしくて、大人

も子供も大声で泣きわめながら必死で走りました。私は生後八カ月の弟を背負っていましたが、夢中で夙川へ飛び降り、阪神国道の橋の下へ逃げ込んだところで、やっと離ればなれになっていた家族と逢えました。外傷をした人、抱き合って神に祈る外国人（白人）、病人を連れ出せなかったと泣きくずれる人、どの顔も煤と涙でドロドロ。その上衣服にも煙の臭いがしみ込んでいました。この日、私の家も、近くにあった夙川カトリック教会もみんな焼け落ち、辺りは焼野原となりました。

私が背負っていた小さな弟は、これが原因で病気になる、入院をくり返しましたが、当時は良いお薬とてなく、かわいそうに、短い一生を終りました。

被災の後は、仕方なく小学生の弟と妹は岡山県へ学童疎開。母と私は、母のふるさとへ疎開いたしました。田舎の生活も非生産家庭では食糧は勿論、何もかも無い無いづくしで不自由な毎日。燃料は遠い山まで枯木を拾いに出かけ、川原で畑を拓いても作物は実らず、慣れない生活で母は勿論、祖父母も疲れ果てる日々。そんな田舎にも容赦なく警報のサイレンが鳴り、艦載機が飛来するなど、日増しに日本各地への空襲ははげしくなり、夏のきびしい暑さがつづく夜も着替えず、

いつでもすぐ逃げられるように常に服を着たまま寝ていました。戦争も末期だったからでしょうか、女学校の転校手続も届かず、疎開以来約三カ月、私は学校へも行けないまま不安な毎日をすごしていました。

八月十五日、戦争は終わったと聞いても、私は素直に信じられず、その夜、祖父が盛大に電気を灯すと、恐ろしくて暗い部屋へ逃げていました。それでもサイレンの鳴らない静かな日が過ぎていくうち、ようやく私も安心して眠れるようになりました。

秋も涼しくなった頃、父が帰り、学童疎開先から妹と弟が、見ましがえるほどやせ細って帰って来ました。当時小学二年生だった弟は、「いつもお腹が空いて、淋しかった」と今でも話します。翌年秋、母方の伯母一家が満州から、翌々年、伯

父夫婦が苦勞に苦勞を重ねた末、やっと引揚げて来ました。

その後、戦後の苦しい混乱期もすぎ、世の中の景気も良くなった戦後三十年頃、しばらく主人の勤務地広島に住んで居りましたが、病院へ行きますと必ず被爆者手帳の有無と被爆者ではないかとたずねられました。待合室では、見知らぬ人たちに被爆体験を語るお年寄りがたくさん居られ、いまだに足の裏に手術で取り去ることができない無数のガラスの破片が入ったまま、と言う方などほんとうにむごい話を聞きました。

戦争のため、大人も子供もみんな大きな犠牲を払い、平和への道のりは大変けわしいものでした。もう二度と、あんなに苦しい思いはしたくありません。心から世界の平和を願いつつ、今年も平和行進に参加いたします。

## 母と娘で歩んだ50年の人生峠

松原市 山田 安子

私の父は昭和十九年七月十八日、サイパン島にて玉碎したと母から聞いており

ます。父の顔は写真で見ただけです。声など全く知りません。仏壇の前の軍服姿

の父の写真は三二歳前後の写真です。

両親の結婚生活は、神戸で四カ月半の月日でした。赤紙一枚で行った父。つわりが始まっていた母も、母の実家で無事女の子の私を産み、どちらか方面へ行っているかわからない父のことを毎日想い、帰りを心待ちしていたところ、私が生まれて半年目に父が突然に帰って来て、やっと親子で過ごした日はたったの二泊三日でした。父が私をだっこしてくれたのは二晩だけです。その時、私の着物がぬれていたで、父が抱きしめて涙を流したんだらうと母が後で気づいたそうです。別れに来たんですね。

戦死の公報が届いた後、父が結婚前から勤務していた神戸製鋼所からの給料も来なくなり、昭和二八年に第一回分としていただいた遺族年金も、滞納していた家賃にあててしまったのが一番つらかったと常に母が言っていました。「雨もりのする家で家主さんに修理してくれるよう頼んでもしてくれない、部屋の隅っこで母と二人抱きあってねてたんです。炊事のことはいささい時から母から教えられました。「水固」は私の得意料理の一つでした。麦味噌をやいて食べたことありません。何もなくて麦ごはんにまぜて食べました。

小学校に入学前から同級生の女の子に

「いじめ」られるようになりました。祖母がすごく残念がり「お国の為に戦争に行っているのに父親が居ないと言うことはいじめなんぞ」と言って泣いていたこともあったんです。中学二年生からソロバン塾に通わせてくれたんです。なんせお金がないのが頭から離れない生活でしたから、でもソロバンで食べていけるようにと、私立でしたが高校へも通わせてくれました。高二の夏休みから学校の分室で私もソロバンを教えるようになりました。小学生の時いじめられた同級生の妹にも皆と一緒に教えてあげました。いじめられたけど差別的なことはず、人の為にと思い腹は立ったけどがまんしてやりました。昼間は農協職員、午後五時すぎたらソロバンの先生に。今迄に比べ夢みたいな毎日ですごく忙しかったです。

結婚適齢期になり、友人がつぎつぎと結婚しているのにも思い出したら、何もかもいやになり農協もソロバンも辞めてしまいました。そして母子で今後のことを話し、大阪へ一人で出て来ました。大阪へ出て来たおかげで主人と出会い、結婚もし、母とも一緒に三人暮らしが出来ました。

母子二人の時の想い出が今日も夢のように思えて、苦勞を苦勞と思わないよう

に、そして強く生きていけるようにという願いで母が躡して下さったことに、ただありがとうと心から言えるようになったのがうれしいです。私にはやさしい主人がついてくれますから、父さん母さん安心をして下さい。父の顔は知らなかったけど、その分母からの愛情いっぱい育てた私ですので、両親に見守っていただいていると思うと、私は頑張ってますよと叫びたい気持ちで一杯です。母は平成七年、七八歳で亡くなりまして、今年は三回忌。母子で暮らした五十一年と十カ月は、私共の人生峠でした。

「おかあさん、お父さんにあえてますか？」新婚生活をもう一度やり直して下さい。物のない時代により教えをして下さった母。私は今日も生協の品物で得意な料理がふえていて楽しい毎日です。

## 疎開学舎の日記から

岬町 古谷 寿子

ここに二冊の日記がある。昭和二十年、大阪の私立小学校に在籍していた私は当時小学五年生。その年の六月から終戦をはさんで二十一年の十月まで書いた、このポロポロの二冊だけが、どういうわけが残っている。

最初の頁は、丁度学舎から家へ外泊を許されて帰って来た日らしい。

六月二十六日 火 晴

「今日は、いよいよ学舎へ帰る日だ。朝少しねぼうをした。本を読んで豆をた

べていると、ぶーぶーと警報が出た。思わずひやりとした。朝から来るので大編隊の様だ。おうちにはラジオが無いので情報が分らなかった。しばらくすると、空襲警報のサイレンが鳴った。すぐ荷物を乳母車についで、山本さんのお庭へ行って行った。お家やお庭は大へん大きいので木の蔭に置いた。すると敵機が真上なので『退避！』といわれた。防空ごうへ入った。すると同時に、さーと電車の通る様な音がしたかと思うと、どんとんと高射砲が鳴り響いた。さーという音は、

大変気持が悪い。暑いなと早く出たいと思っていると、ドンとはげしい音がし、それと共に地ひびきをした。びっくりして、ふせをした。まもなく解除になった。足がしびれてきて立てない。外へ出ると大変気持がいい。荷物を、ぼとぼち家へはこんだ。以下略。

七月の日記は、一日のたべたものが書かれ、いつも「大へんおいしかった」で終わっている。代用食で「じゃがいも」のたいたのもの。豆、こうりゃん、メリケン粉の団子、いいときでパン、うどん、時に玄米ごはん等、献立はくわしい。いつもお腹がへっていたのを覚えている。

七月十四日 土 晴

「今日の朝食はおかゆで、おつけものが入っていて、おうどんがおかゆの中に入れて、大変おいしかった。お布団を運動場に干しに行った。それからお部屋の大掃除をした。たたみを上げると、のみがびよんびよん飛んでいた。きれいに拭いてから、のみとり粉をふった。また、たたみをひいて、きれいにした。お昼食は赤い御飯(こうりゃん入)で中じゃがいもが入っていた。便所のお掃除をしてから夕食当番まで寝た。夕食は、はるさめで中にしんが入っていた」

七月三十日 月 晴

「今朝早くから警報が出て、地下室へ退避した。解除になって部屋へ帰り整頓しているときまた警報が出たりした。昼食はじゃがいもでお汁があった。おいしかった。お部屋のお掃除をしていると爆音が聞えたので、のぞくと敵機が一機まい降りて来て『ただただ』と機銃掃射をした。びっくりした。すぐ地下室へ退避した」

近くの山を先生と一緒に耕し野菜を作ったので、それを中心に献立を作って、子供達にたべさせていた先生方の御苦労もよく分る。でも、全員栄養失調きみで、のみ、しらみは全員わかせていた。また、面会日があり、その日はいつもよりいろいろたべるので、次の日はみんな下痢をして、便所のおそうじは大変だったことも思い出す。

八月十五日 水 晴

「無条件降伏の日。朝のお話は、体操をしっかりとしようというお話であった。勉強は国語の書取りをした。体重を計ると少しへっていた。昼食はじゃがいもだった。たいこが鳴り職員室へ集った。重大放送があるそう。天皇陛下が御自身で御放送になるそう。放送は、私達には何の事か分らなかった。あとで先生から

無条件降伏をしたという事を聞いた」

当時、天皇陛下は神様の様な存在であり、私達も涙を流したものだ。疎開学舎からの帰宅は九月に入ってからだったが、大阪へ帰ってから食料は配給で服もボロボロ。私も五年生で、妹をおんぶして配給をもらいに行ったり、まきで御飯をたいていたのでそれを運んだり、お手伝いで一日すぎで行った。土地は、

だまされてなくなり、家は焼かれ、バラックに住みながら、父亡きあと祖母、母、兄弟四人、みんなで力合せてあの終戦時をのり切った。母は働き、妹・弟の世話は当然の様にしていた。あの何年間は、私にとって何物にも変えることが出来ない、貴重な体験だった。この日誌を宝物として今まで生きて来たし、またこれからもそうしたいと思う。

## 戦争はいやだ

東大阪市 木下 絹恵

私が戦争というものに出会ったのは、小学校一年生の頃です。学校で空襲警報に備えて訓練があり、椅子を机の上に乗せ、その下に潜ることでした。

戦争が激しくなり大阪も空襲を受ける恐れがあると言うので、和歌山に疎開することになりました。ところが大阪を避けて和歌山に避難したにもかかわらず、昭和十八年（幼かったので記憶が定かでない？）の夏の夜、B29の空襲で被災してしまっただけです。

その夜は、養父は宿直で留守でした。空襲警報が鳴り響き、爆弾のさく裂する音のなかを、養母は脚の不自由な私を背負い、祖母の手を引いて逃げてくれました。養父母の間では、空襲になったらお城の防空壕へ逃げようと約束していましたが、阿鼻狂喚の人ごみに押され、何処をどう走ったのか、気づいた時は大きな川の川岸に来ていました。「○○ちゃん！お父さん！お母さん！」と家族を呼び合う悲痛な声が暗闇のなかを飛びかっ

ていました。向こう岸も焼夷弾にやられ、あちこちで火災が発生し、燃え上がる火の粉はまるで火花を見ているようでした。花火とは不謹慎な言葉ですが、子供心にぼう然と放心状態で見えました。しかしガスタンクのような大型タンクが轟音と共に爆発を起し、火柱が夜空高く吹き飛ばされると周りの人達から「あー」と悲鳴があがりました。

朝になると、早くも耳に轟くサイレンの音に逃げまどい、防空壕を求めてさまよいました。ようやく見つけて行ってみると、その中には火傷を負ったおじいさんが寝ており、その周りには大勢の人がひしめいて私達が入る余地はありません。しかたなく別の防空壕を探して歩いてみると敵機が来襲し、しかも低空飛行で人を目掛けてダダダッと機銃掃射してくるのです。これは生きた心地がしませんでした。

私達は家を目差して歩きましたが、町は焼け野原となり、まだブスブスと燃えているところや、電線が垂れ下がった道のあちこちに死骸が横たわっていました。我家も無残に焼け落ちてガレキの山となっており、そこに家族を探して戻って来た養父と出会い、無事を喜び合いましたが家が無く、これからどうすればよいか両親も途方に暮れて、溜め息ばかり

が出るのでした。

学校で炊き出しがあると聞き、おにぎり一つずつと乾パン一袋をもらいました。養母の故郷山形へ一昼夜を要して行きませんでした。混雑する列車は席を立つこともできず、座りばなしで腰は痛くなるし、暑くても窓をあければ汽車の黒煙が入ってくるという状態でした。そのうえ食べものも少なく、手渡されたおにぎりは夏のこととて、すえた臭いのするもので喉を通りませんでした。

山形へ着いてもバスはなく、食糧団の米を積んだトラックの荷台に乗っていました。遠い親戚を頼って山形での生活が始まりました。しかし、田舎では養父の仕事もなく貯金を食いつぶす日々だったようです。

戦局はだんだんと最終段階に入り、山形の家にも、その当主が中国から引揚げて来ました。ますます居づらくなってきた時に終戦になりました。戦争が終わっても本土決戦になるとか、女、子供は、じゅずつなぎにして殺されるとか流言飛語が発生し、これからどうなるのかと不安でした。養父は大阪に帰る決心をし、帰日もまた馬の引く藁束を積んだ荷車にゆられて駅に行きました。

帰阪しても終戦後の混乱した世相の中で、中年を過ぎた養父の仕事先も見つか



らず、毎日の生活に苦勞しました。終戦後の物不足で栄養状態が悪いとき皮膚病が流行し、私もそれにかかり全身に発症して膿を持ち発熱や痛み、かゆみに悩まされました。

こんな戦争の犠牲のうちに、二人の父は相次いで病を得て実父が先に養父は遅れてあの世へ旅立ちました。その後は実母、長姉、次姉、私の女ばかりで戦後を生き延びてきました。今思えば、本当によく生きてこれたものだと思えます。

誰が戦争を起こしたのか、国民はそれを止めることは出来なかったのか、幼かった私にはわかりませんが、多くの国民を

犠牲にし、国土を焦土と化し、北方領土を失い、諸外国の人民に苦難を与え、従軍慰安婦や中国残留孤児を生み、多くのつらい代償を残しました。その戦争の後処理を私達、またこれからの子孫にも引き継いでいかなければならないのです。

今だ、世界中のあちこちで戦争が起こっており、私達と同じ苦しみをもつ人々がいることは悲しみに堪えません。日本は不戦の誓いを心に刻み、人民の声の届く政府、国家であるように一人ひとりが努力し、世界にも戦争が無くなるように訴えていかなければなりません。

## 学童集団疎開・本土空襲・終戦

東大阪市 永井 時江

昭和十九年夏の初め、校長先生から学童集団疎開についての訓話があり、学童の生命を守るためにと云う趣旨と、疎開先での生活規律や注意事項を緊張しながら聞いていました。

夏の暑い日、両親や兄に送られ、先生と寮母さんの引率で南河内のお寺へ疎開

着くと先ず本堂へ参拝して各自の荷物の整理を始めました。扉のないロッカー式の木箱へきちんと小物や衣類を収納。夜は本堂でみんなと一緒に寝たのですが、冬は足が冷えて寝つかれず、ずっと足をこすり合せてやっとの事で暖まり、寝入ったことを思い出します。

すこし疎開先の生活を思い出してみました。入浴はお寺のお風呂に週二回、銭湯へ月二〜三回。洗濯は、お寺の洗い場を使用することもあります。冬、水が冷たく寒いので手にシモヤケ、アカギレができて辛かったです。食事は材料の調達と献立は先生と寮母さんがして下さいました。私たちは食器、お茶を運んだり、後片づけをしました。内容は、朝はお粥どんぶり七分目位、なっぱの漬物少々、時々味噌がきます。昼・夕食は御飯茶わん六分目、なっぱの煮物、時々魚やたまごもありました。一日一回のおやつは、サツマイモ、みかん(一個)、カンパン(五個)、大豆を炒ってしょう油を少ししかけたものなどのくり返したと思えます。授業はというと、午前中は近くの国民学校で学習、お昼からはお寺の本堂で復習をしたり、先生の授業を受けました。時々近くの川や田んぼへ行って、生きものや虫の観察をする理科、手芸や料理の話や家庭科もありました。手旗信号の練習も二〜三回あったと思います。

一番困ったことは、毛髪や衣類や下着にシラミが発生して、かゆくてかゆくて、湿しんのように赤く腫れたので、先生や寮母さんにお薬をぬってもらいました。一番嬉しかったことは、秋になったある

日、母と親戚の兄が面会に来てくれたことです。おにぎりや魚貝類、手作りのおやつ(麦を油であげて砂糖をからめたもの)を持参してくれました。しばらくぶりに母の顔を見たので涙がこみあげてきました。がまんして近づきました。母は約一時間ぐらいいして帰って行きました。昭和二十年三月、国民学校卒業と女子校入学準備のため大阪の自宅に帰りました。帰宅してすぐ、警戒警報と空襲警報が発令され防空壕へ。モンペ着用、防空頭巾携帯、布袋の中には大豆とカンパンと水筒を入れて常備する毎日。夜もこの衣服のままねむるのです。三月十三日の大阪空襲では、自宅の庭に黄燐焼夷弾が落ちました。青白い光を発して、母と私とで砂をかけるのがやっとなりました。四月には女学校に入学しました。が、七月の堺空襲のため学校は全焼。終戦の時まで焼けあとの片づけ作業でした。

八月十五日、午前中に先輩より連絡を受けて、校庭に集まりました。集まった生徒は四〜五十名。正午、焼け残った近くの寺院で玉音放送を聞き、戦争の終りを知ったのです。

今では想像もつかない体験でした。戦争の悲惨さと、平和の大切さを実感しました。次の世代の人に風化させないよう語り伝えて行きたいと思えます。

## 祖父と祖母の戦争体験

八尾市 吉村 美佐緒

大正四年生まれの祖父の体験です。私が高校生の時、体験を手紙に書いてくれました。今でも、大切に持っています。祖父は奈良県で健在しておりますが、戦争の話になると祖母も涙しています。

小生、昭和十年十二月、現役兵として奈良第三十八兵隊第一機関銃隊に入営する。同月、満州チチハルへ守備部隊として駐屯。昭和十二年奈良の元隊に戻り、家に帰れる事を皆々で喜び準備完了した時、日支事変が起こり動員令が下る。

我々三年兵の満期している者も召集令状を受け、戦時人員に向かいました。戦線で前進命令が出れば、工兵隊の様な部隊は、雪の中でも、河の中でも、只前進あるのみ。戦友が戦死すれば、無人の家の燃える物を集め、戦友を焼き、骨をたばこの缶に入れて親友が首に吊り、戦いました。敵軍を撃ち殺し、勝利を得るまで。友軍の為に、我々の左方監視部隊が全滅し、食糧、馬を奪われて、包囲され

てしまいました。撃たれながらも逃げ、肺貫通した者もいます。祖父も足に弾の跡があります。結果、部隊移動は、北支、中支、北支満州、最後にはニューギニア南方戦で、全滅状態でした。

B29の飛行機により、大阪、和歌山、城、市を焼かれた時、それは、死を目前に……言葉や文書では表現できません。体験した者だけが知る、生や生活の其の場の戦いだったでしょう。少量の米と麦粉の配給がありました。高い代価を払い、米を求めた事もありましたが、副食が無く梅干しが力を発揮しました。衣類は、今の時代にとっても見せられる物では無かったです。今も。女子はモンペ。男子は背虎。何もかも不足で、普段の何倍もの価を出さずには、買えない物ばかりでした。仕事が無く、収入も無くなり、お金はどんどん減りました。動物、人間、虫をも殺す戦いですので、命や生活を保つ為、学問は二の次でした。

待っている祖母も、防空壕に何度も逃げたり、外人軍が襲いに来ました。しかし、外人軍が家に侵入してきた時、祖母はお産の最中でした。さすがの外人軍も、その時ばかりは、おとなしく去って行ったとの事です。幼い子を連れて、河に逃げたり、生きた心地がしなかったと話し

ていました。医学の進歩もなく、流行病で一人目の子供が三歳で他界してしまいました。

戦争中も、終戦後も、何もかも無くしての不自由な生活。もう、二度と戦争なんてしたくはありません。

## 沖縄の祖国はいつに帰るのか？

堺市 小畑 愛子

祖国復帰して良かったのか否か？と問われても答えることは難しいものです。それは、先日、強行突破された特措法の延長線上にあることですが、沖縄の祖国復帰が諸悪の根源である。基地つき、おまけに復帰後は何の恥も外聞もなく自衛隊まで堂々とのりこんできたことを思う時、『復帰とは何だったのか？』を日米両政府への不信感がふつつつと強まるだけです。

これまでの歴史的な沖縄差別に対して私達ウチナンチューは本当に心を痛めている(肝ぐるさん)のです。日米政府は手を組んで沖縄に向かって「これで永久

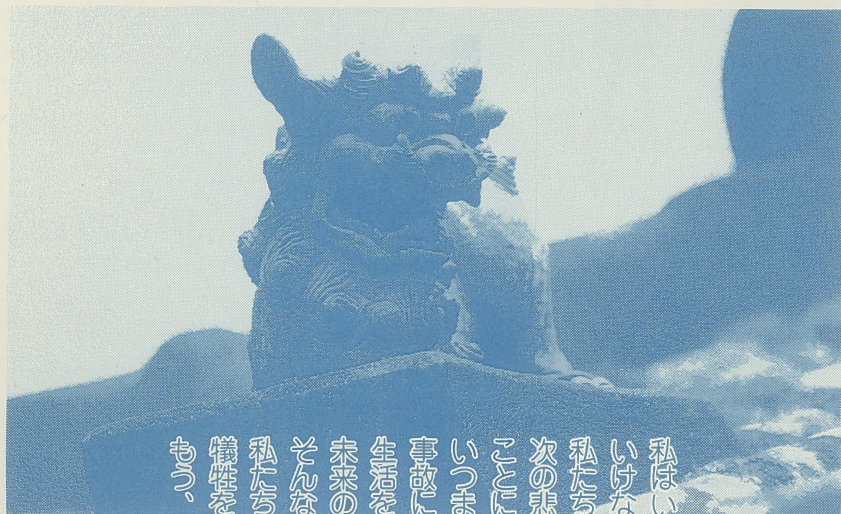
に基地は使えるのだ」と叫んでいるとは思えません。これでは沖縄はどこを向けばよいのですか。日本政府に沖縄の心が伝わらないのは、日本人全体が悪いのでしょうか？いいえそうではないと思うのです。

阪神大震災のときも、日本海重油流出事故のときも、日本津々浦々から暖かい心をもった方がおし寄せてきたではありませんか。政治家がまともな仕事をしてないので。政治家は国民全体の生活向上のために働いて頂きたいものです。

私は戦後の一九五〇年生まれですが、

'97 夏の班長会・班会 お店組合員のつどい

# 平和学習資料



私はいま、決してあきらめてはいけ  
ないと思います  
私たちがここであきらめてしまつてしま  
うことは  
次の悲しいできごとを生みだしてしま  
うことになるからです  
いつまでも、米兵におびえ  
尊敬におびえ、危険にさらされながら  
生活をつづけていくことはいやです  
未来の子どもたちにも  
そんな生活をさせたくありません  
私たち生徒、子ども、女性に  
犠牲を強いることは  
もう、やめてください

「米軍人による少女暴行事件を糾弾し  
日米地位協定の見直しを要求する  
沖縄県民総決起大会」で高校生代表  
として発言した仲村満子さんの  
ことば（'95年10月21日）

## もくじ

ヒロシマ・ナガサキ被爆の実相	26
原水爆の禁止を求めて	28
核兵器の即時廃絶を求めて	30
在日米軍基地の実態	32
基地の島・沖縄	34
日米安保共同宣言	36
日本国憲法	38
黙っている平和は守れない	40
“いすみ”の平和活動	42
'97夏の平和活動のすすめ方	44
資料	46

沖縄で生まれたというだけの理由で、五  
歳頃まで空襲警報があり、なぜか、夕食  
時の午後七時頃に多かったように記憶し  
ています。当時は、今のようには、ガス・  
電気はない時代でしたので、消すのもつ  
けるのも大変でした。火を消すのが遅い  
と隣組、警防団より警笛ならされたりし  
たので、大変でした。私は兄と二人でお  
ふるを炊く役割があったので、兄がいな  
い時など一人で火の番をしている訳です  
が、消すのに手間どりよく父親に水をか  
けられた苦い思い出があります。  
日本本土はその頃、戦後五年だったの

かも知れませんが、よく考えてみると沖  
縄はまだ戦争中だったんですね。  
日本政府は、沖縄をすて石にしたから  
太平洋戦争で助けて貰ったという意識は  
全くないのでしょいか？  
戦争で何をできるかと言  
うのでしょうか？ 私達は失うものばかりか、  
その後の長い生活苦との戦いが続くだけ  
なのだ。そして、家族がバラバラになっ  
たり、孤児が残されるのだ。こういった  
愚かなことは一刻も早くやめてもらいた  
い。